

かねこせいいちろう
金子清一郎

初代金子清一郎は、天保13（1842）年、北越後の長岡藩瓜生村（現・新潟県長岡市）の庄屋の家に生まれました。戊辰戦争では官軍に加わり各地を転戦していますが、明治10（1877）年から17年まで生地で戸長を勤めました。しかし、明治21（1888）年、46歳で花畔村六線（現新港東2丁目）に移住します。この時、自分がこの地に住んだら、数年のうちにこの村落を300以上の戸数にすると公言したそうです。

清一郎は移住後、村民に野生のクワを利用した養蚕を奨励しました。

明治24（1891）年、花畔村総代人に推された清一郎は、実弟の田所正義を越後から呼び寄せ、村の子供たちの教育にあたらせました。明治25年には、毎年融雪期の水害で遮断される道路状況を改善するため、大排水を作ることを道庁に請願しました。和歌山の上山英一郎（「金鳥」の創業者）から種を取り寄せて除虫菊栽培も始めています（石狩ファイルNo.40「石狩の除虫菊栽培」参照）。除虫菊については、その後栽培だけにとどまらず、製薬、販売も手掛けました。

明治26年には、7条からなる村民契約証を結びました。また、自費で測量をして区画を定め、殖民地撰定願を提出しています。明治27年には、神社地を定めるとともに共同墓地の撰定を願っています。

こうした清一郎の尽力が実を結び、明治32（1899）年には、花畔村の戸数は325戸となっていました。また、清一郎は、オサットー（現・千歳市長都地区）でのコイ、フナ、ドジョウなどの養殖事業も手掛けています。江別市野幌の開拓に功績のあった北越殖民社社長の関矢孫左衛門とは、北越時代から親交がありました。

初代金子清一郎はこのように、大正5（1915）年に75歳で亡くなるまで、花畔村の基盤作りに尽くした人物でした。

跡を継いで大正5年に二代目金子清一郎を襲名した安東岩平は、明治6（1873）年、熊本県飽田郡塩屋村に生まれました。明治22（1889）年、16歳で実兄とともに北海道に渡って篠路屯田に移住、明治31（1898）年に初代の長女コウと結婚して金子家の養子となりました。石狩町除虫菊栽培組合長、花畔土功組合議員、町会議員などを歴任した人物です。

（記載年はいずれも金子家文書による）

（石井滋朗）

- （1）石井滋朗（2005）石狩の除虫菊栽培. 石狩ファイル, 40.
- （2）金子家文書（いしかり砂丘の風資料館所蔵文書・石狩市指定文化財）
- （3）金子仲久（1988）除虫菊について. いしかり暦, 7, 10-20.
- （4）村山耀一（2006）金子家文書. 石狩ファイル, 66.